

SMOKERS' STYLE COMPETITION 2007

古谷誠章 六鹿正治 妹島和世 西沢大良 佐藤英治 熊倉一郎 佐藤直樹



テーマ座談会

ふるや・のぶあき

1955年生まれ / 1978年早稲田大学工学部建築学科卒業 / 1980年同大学院修士課程修了 / 1994年八木佐千子と共同でNASC設立 / 現在、早稲田大学教授

ろくしか・まさはる

1948年京都府生まれ / 1971年東京大学工学部建築学科卒業 / 1973年同大学院修士課程修了 / 1978年～日本設計 / 2006年4月～同社代表取締役社長

せじま・かずよ

1956年生まれ / 1979年日本女子大学工学部建築学科卒業 / 1981年同大学院修士課程修了 / 1987年妹島和世建築設計事務所設立 / 1995年～西沢立衛とSANAA設立 / 現在、慶應義塾大学教授

にしざわ・たいら

1964年生まれ / 1987年東京工業大学工学部建築学科卒業 / 1993年西沢大良建築設計事務所設立 / 現在、東京理科大学、東京藝術大学他非常勤講師

さとう・えいじ

1936年生まれ / 1963年早稲田大学工学部建築学科卒業 / 1985年イーエスアソシエイツ設立

くまくら・いちろう

1976年東北大学大学院工学研究科修了、日本専売公社入社 / 1999年～日本たばこ産業株式会社 たばこ事業本部 研究開発企画部長などを経て、2007年6月、代表取締役副社長 たばこ事業本部長兼特機事業担当

さとう・なおき

1961年生まれ / 1998年アジール・デザイン、2004年アジール・クラックを設立 / 現在、アジール・デザインおよびアジール・クラック代表兼アートディレクター、多摩美術大学造形表現学部デザイン学科助教授

古谷 昨年は、人を分けずに煙を分けることをテーマに、分煙のアイデアと作品例を募集しました。課題は「パブリックスペースと分煙」としましたが、はじめはこのテーマがたばこを吸う人と吸わない人、つまり人を分けてしまうイメージがあるのではないかと議論されました。けれど、人を分けていくのではなく、煙だけを分けることで、喫煙者も非喫煙者も共存できるのが「分煙空間」であるだろうということで、実際に提出された案もそれに則した解答がさまざまに出されていたと思います。

このコンペも2年目を迎え、今年は選ばれたアイデアを実在するカフェという場で実現することになりました。カフェにおいて分煙空間を実現することに対してのお考えをまずはじめに熊倉さんにお聞きしたいと思います。

熊倉 昨今、健康増進法や社会的な要請により、オフィスや商業施設においては執務スペースやテナント占有スペースなどは禁煙とし、喫煙スペースを別に設けることが一般化しつつあります。一方で飲食店においては、食事やお茶を楽しんだり、友人との語らいの場であったりとさまざまな目的を持つ方の中で、たばこを吸われる方と吸われない方が同じ場を共有しているということが日常の風景として存在すると考えております。そのような飲食店における、吸われる方と吸われない方との共存は私共にとって非常に大きな課題となっております。そこで、コーヒーやお茶、夜はアルコールかもしれませんが、年代性別を問わず、多様な目的を持った方々が利用するカフェという空間における分煙について、建築やデザイン・設備等の視点から斬新なアイデアを募集すると共に、実際に具現化し、多くの方にご利用いただくことを考えております。

分煙という課題は難しいのですが、そういう場所に対して、空間設計でもプロダクトでも、きちんとした提案ができれば、たばこを吸われる方も吸われない方も、リラックスして過ごせるカフェができるのではないかと私たちは考えています。人を分けるのではなく、煙を分けるという分煙空間の真髓に対する画期的な解答が見出されるのではないかと、大いに期待しています。そしてそれが汎用性のあるものであれば、さらに嬉しく思います。

西沢 今のお話は、カフェというものの本質を突いていると思います。オフィ

スや空港よりも、カフェでこそ分煙が実現されるべきだということ、現状のオフィスや空港は喫煙室と非喫煙室をキッチリ分けていて、それはおそらく管理の容易さから後押しされているのですが、しかしカフェというものは本来、そうなるにはいけない場所のほうですね。カフェは打ち合わせに使ったり、家族と行ったり、友達と何年ぶりかで会ったり、いろんな使われ方がなされます。人の組み合わせが最も多様な場所がカフェであり、その上でリラックスできないといけない。どこに誰と座っても、たばこを吸う人も吸わない人も楽しく過ごせれば、最高のカフェができるでしょう。カフェをテーマにすることは、分煙にとって非常にいいチャレンジになりますね。

六鹿 そうですね。今回は飲食店全般の中から特にカフェが選ばれたわけですが、カフェに行く時には、私たちの心の状態はどこかくつろぎを求めている、その場所でホッとしたい、一息つきたいと思っているものです。それはたばこを吸う人も吸わない人も同じ気持ちでしょう。ところが、たとえばたばこを吸う人がいない空間にたばこを吸う人が入ってくると、何となく一瞬緊張したような空気が流れます。そしてその空気を感じた喫煙者もまた緊張してしまう。そういうふうには、本来くつろぐために入った場所なのに、お互いに気持ちは穏やかになれない。昔はもう少し、たばこを吸う人と吸わない人が同じ場で共存できていたと思うのですが……。だから、もしみんながくつろげるような、分煙が実現していて、さまざまな嗜好を持つ人が共存できるカフェが実現したら、フロンティアとして素晴らしいことだと思います。そのための具体的なアイデアを実施するこのコンペに、どんな案が出てくるのかとても期待しております。

妹島 六鹿さんがおっしゃるように、お店でたばこを吸うことに関しては、最近ちょっと緊張することがありますね。私がたばこを吸うものですから、吸わない人と一緒にいると、お互いに気を遣ってしまっ「吸ってください」「いや大丈夫ですから」という具合に妙なことになってしまう。喫煙・禁煙ときちんとエリア分けされているお店でも、実は気の遣い方はあまり変わらなかつたりします。エリアを分けていても空気の流れが十分に考えられていないことが多く、煙がたばこを吸わない人がいるエリアに流れてしまっていないか常に注意しな

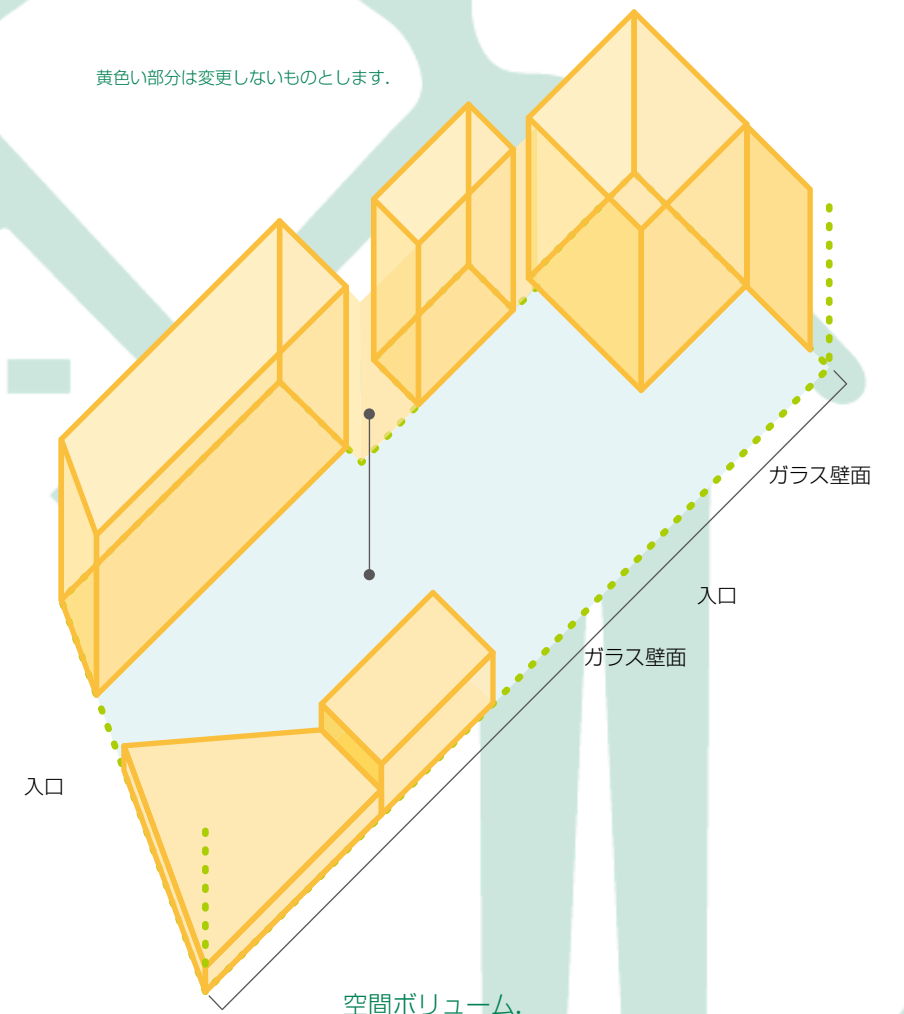
くてはなりません。なので、煙をどうふうに分けるかはとても重要だと思います。ただ、私それだけではなくて、カフェにおける人の感覚とか、空間の密度感のことも、もっといろいろな全体のことも考えながら、提案してもらえると面白いのではないかなと思いますね。

古谷 それは空間的な提案ですね。逆に装置的だったり設備的なものだけで解決する方向もあると思いますが。

妹島 実在の店舗の改修になりますので、制限などが多いかもしいれませんが、もし装置的・設備的なものの提案であっても、たとえばそれらをどう置か、どう見せるかということも重要で、そこから新しいカフェ空間ができてくるのではないかなと思います。

佐藤(英) このコンペは建築家に対して反省を促す部分もあると思います。喫煙室をガラスで囲って真ん中に空気清浄器を置けばよいという発想。そのような場所を安易につくり出してきたことに対して問いただすようなテーマだと思います。よいアイデアを出すにはなかなか厳しいテーマなのかもしれませんね。でも、今回はカフェであることにひとつの面白さがあります。隔離して分けしたらそれで終わりという訳にはいきませんからね。喫煙だけを目的にして立ち寄り人のための場所をつくるのではなく、多様な目的を持ってその場に存在する人たちに解答を提示しなければならぬのですから。すくなくとも煙は設備エンジニアが何かすれば

黄色い部分は変更しないものとします。



SMOKERS' STYLE COMPETITION 2007

SMOKERS' STYLE COMPETITION 2007

済むという時代は終わったと思います。というか、それだけやっけていられない。

西沢 昔の喫茶店というのは、「コーヒーを飲む」というひとつの目的しかなかったでしょう。コーヒー自体も種類がなくて、それでもみんな満足していた。でも今はもっと多様になっていて、飲み方もお店で飲むだけでなく、テイクアウトしたり、ボトルに分けてくれたりするようになりました。コーヒー自体も種類が増えて、煎れ方や味、トッピングやフレーバーなど、微妙な個人の好みに応えるようになりました。その意味では、一緒にいる相手を選ばずにカフェでリラックスできることは、より求められているはずなんです。最近のカフェの中には喫煙者をブロックアウトしている例もありますが、それはカフェの本質を見落としている気がします。むしろたばこを吸う人たちの多様性と、吸わない人たちの多様性を、同時に考えた方がいいです。たばこを吸う人にも吸わない人にも共通している好み、たとえば特定の香りの好きな人たちのエリアとか、煙が立ち消えてほしい人たちのエリアとか、そういういろんなスペースを用意するのもあるかもしれません。ただし、煙については、やはり放っておくわけ

をどのぐらいの幅で募集するかというと、1次審査の段階では装置的なものであれ、家具、建築レベルであれ、まずそのアイデアを聞きたいと思います。想定するカフェの場所は、東京で若者の集まる街界隈と決定していますので、カフェのおおまかな平面と天井の高さは提示します。けれど、1次応募の段階では、具体的な設備スペックだったり、具体的な店舗の特定等はいりません。あくまでも、アイデアが求められるということになります。1次審査通過者には具体的な場所と平面図等の詳細をお伝えするという認識でよいでしょうか？ また、応募者の方にアイデアを出してもらおうと、何かご意見はありますか？

熊倉 できるだけ条件のよい、広さも天井高も十分にあり、応募いただく皆さんの自由なアイデアが具現化可能となる場所を確保すべく対応しておりますので安心して下さい。

古谷 前回の案の中では、装置的というところでは手のひらで煙を処理するような案、もうちょっと建築的には大きなソファを置いた案がありましたよね。ああいうのもよいですね。

西沢 ソファは装置的ではなくてファニチャーの提案ですね。

六鹿 それから天井から何かぶら下がってくる案もありましたね。

古谷 今回のカフェは比較的天井高もある場所を想定するようですから、その辺の気積もヒントになるかもしれません。

妹島 もうひとつ前回の作品の中に、大きな空間を

利用した提案があったと思います。あのドローイングを見て思ったのは、ここだったらたばこを吸う人も吸わない人も周囲の人をあまり気にしないでいられるのではないかなということでした。煙というものを、単に立ち昇るのを楽しめて、みんながリラックスできそうだなと思ったんです。あのような場所は、ある意味で人が分けられず、たばこを吸う人も吸わない人も楽しむための空間になっている新しいビルディングタイプの提案ではないかと感じました。

六鹿 実は、たばこを吸わない人にも幅があって、煙やおいさをちょっと感じるだけでも駄目な人もいるし、自分は吸わないんだけどたばこがあってもよいと考える人もいますよ。先程西沢さんが吸う方を含めた多様性のことを

話されていましたが、そういう幅をどう捉えるかもポイントになりそうですね。

単純に隔離したり、煙をすべて除去してしまうような解決は、結局は不幸な人間関係を生み出してしまう気がします。できれば席毎に個別でコントロールできるといいですね。その人の好みで選べるような場所のあり方です。

熊倉 そうですね。冒頭で述べたようにオフィスなどと違い、カフェの特徴

を利用して、ある一定の場所を特定し、たばこを吸われる方と吸われない方を分離するのではなく、多様な嗜好を持つ方が集まり、お互いを理解して許容し、語らえる場所を実現していただきたいですね。

妹島 煙をちょっと吸うのも駄目な人もいますが、うすらとした煙やおい

だったら、許容してくださる人もいるのではないのでしょうか。たとえばバーのような夜にお酒が飲める場所は、完璧にクリーンな環境より、ゆらゆらと立ち昇るたばこの煙が見えるぐらいの猥雑

さがあつた方が、何となく雰囲気があつて落ち着きませんか。まったく受け付けられない人は別にして、ここまで

の範囲だったら許容し合えるというような、カフェでの分煙のあり方、前回で提案された「朝のたばこ」案のような、そのスペースがくる人を選ぶんだけど、ある程度の幅でさまざまな人が出入りできるようなカフェ。そういうカフェの中に、どのように分煙するかがきちんと考えられていて、ちょっとにおいがあつて、ちょっと煙があつて、お酒が飲めて、人が分けられないからいいなあと思えるようなカフェ。そんな新しいカフェスタイルが提案されれば、みんなが楽しめそうですね。どうでしょう。

古谷 ここではたばこの煙が特別視されてしまっていますが、たとえばカフェでコーヒーを飲みながら人が集まって話している時、おしゃべりな人と口数の少ない人がいるけど、一緒にいても平気じゃないですか。隣はちょっとうるさいな、ぐらいで。たばこの煙やおいさ、そのぐらいの感覚で感じてもらえる仕組みのあり方も可能性がありそうですね。

西沢 許容の幅をコントロールするのもありますね。

妹島 全員静かにしないでいいかと、うるさいから音を全部吸音してしまう、そんな話ではない解決ということですね。おしゃべりも、音楽も、たばこもお酒もあらゆる嗜好が混在してひとつの空間をつくり出しているような。

西沢 選べるといういいですね。お店の中にやや混ざり目の所、わりと空いてる所、わりと分離されてる所などがあつて、そういう煙分布や飲み物分布に家具のランドスケープが対応していて、公園のピクニックのように、好きなところでお茶を飲むとか。

佐藤(英) ここで吸う、ここでは吸わないというのがはっきり分かれている空間はおもしろくないですよ。そういうことではないんですよ。そういえば、以前に妹島さんが気持ちのいい喫煙室があると書いていましたよね。

妹島 すごくよいと思うのは、ドイツのデュッセルドルフの空港です。いろんな所にぼつんぼつんと小さなカウンターが置いてあるので、そこでみんなパラパラとたばこを吸っている。そこには仕切りは全然ないんです。がらんとした大きな空間でしたから、密度の低さということがあつたのだとは思いますが。

六鹿 空気の流れのコントロールを、設備的ではないように上手に見せながら建築あるいはデザイン的に処理するのはひとつのやり方でしょうね。そのような提案がいっぱい出てくる可能性を感じます。ただし、空間全体だけで解決するような一律なやり方ではなくて、その場所その場所から選べるような、タスク・アンド・アンビエントのタスクの方。電気スタンドのようにつけたり消したりできるような環境としてのシステム。そういう解決もあるのではないのでしょうか。

西沢 装置的な提案は、それだけを目的にしないようにしてほしいですね。やはり世界でいちばんリラックスできるカフェという、環境全体を提案してほしいです。その環境を実現するための要素として、コーヒーやお茶があり、テ-

ブルや椅子があり、照明や音楽もあつて、たばこやお酒もある。周りに気を遣わずにお茶を飲むように、たばこも吸える。吸わない人も気にならないよう



2006年度アイデア部門佳作：降矢宣幸案。



2006年度アイデア部門優秀賞：大西麻貴+百田有希案。

にする、そのための要素のひとつとして、装置的な提案を捉えてほしいです。このあたりのことについては、2次審査の際に追加提案を求められることになるかもしれないです。

佐藤(直) 装置的なものといった場合、理想論でアイデアはすごくよいけれども、何かの画期的な開発を待たないと実現できないというものではなく、今あるものを使った組み合わせで提案してほしいですね。要するにアイデアと知恵で解決し、あつ、なんでこんなこと思いつかなかったのかなという発見があるとよいです。カフェという場所を考えると、空気清浄器を設置するといった個別解決ではなくて、やっぱり総合性が必要でしょう。くつろぎという言葉の中には本当にいろんな意味が入っていますから、限定的な個別価値での解決ではなくて、複合的な人間関係みたいなことにもちゃんと想像力が働いていないと面白くないだろうなと思

います。個人的にはカフェ

の場合、そこに長くいたいという感覚を重視しますので、確かに煙はとでもキレイに分かれているのだけれど、ところでここはくつろげる場所になっているのか？

ここでリラックスできるの



座談会の様子。／撮影：本誌写真部 山森誠

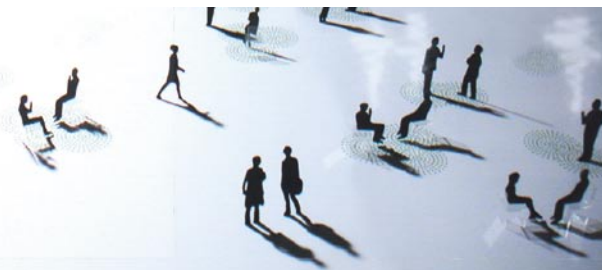
か？ という点に関する解決も設計思想の中にきちんと組み込まれた提案を期待しますし、そういった部分にもデザイン感覚を求めたいです。

熊倉 中世ヨーロッパにおいて、最初のカフェが登場して以降、カフェというのは、さまざまな人が文学や音楽、政治などについて意見を酌み交わしたり、ひとりで思索に耽ったり、あるいは恋を語る場所だったはず。今回のコンペにおいて、多様な価値観を持った人たちがお互いの嗜好を理解・尊重し、同じ場を共有しながら素敵な時を過ごすことができるという面白いアイデアが出てくることを強く期待しています。

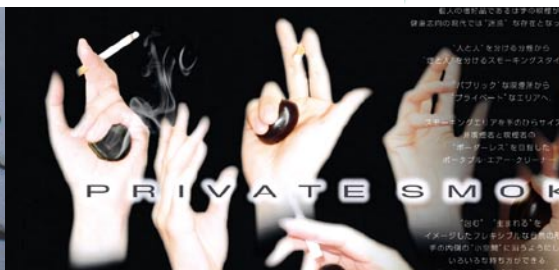
古谷 ありがとうございます。実現に繋がる、しかし創造性溢れる提案を待ちたいと思います。

また、今回も昨年同様、実際に場所として実現している作品例部門での募集もあります。プロポーザル部門に比べると、どうしても現実の諸条件で拘束を受けられるものだと思いますが、こちらも前回以上に柔軟なアイデアを期待しています。是非、数多くの作品のご応募をよろしく願います。

(2007年2月27日日本たばこ産業にて、文責：本誌編集部)



2006年度アイデア部門最優秀賞：小松一平案。



2006年度アイデア部門佳作：福富葉子ほか3名案。

にはいかないでしょう。煙は空間の気積や気流で対処できるので、設備や家具の工夫が必要でしょう。

古谷 熊倉さんはどういった提案が出てくることを期待されていますか？

熊倉 カフェでちょっと一息つきながらリラックスしてたばこを嗜んでいる時に、同時にたばこを吸われない方とも和やかにコミュニケーションが取れるような空間的なアイデアや、利用している方では気付かないところでのちょっとした工夫や造作によって現状よりも煙やおいさの行方を気にせずいられるようなアイデアを期待したいですね。

古谷 そういう意味で、今まで話してきたように、たばこを吸う方も吸わない方もお互いが共有できる空間の代名詞がカフェであり、それが今回私たちが提唱したい強いメッセージだと思えます。このコンペで出された提案を、ひとつのプロトタイプとしてつくるけれども、できればもうちょっと普遍化できるようなアイデアで、今後展開可能なものも出てくるとよいですね。

熊倉 基本的な造作モデルあるいは基本的なコンセプトとなり得るものが出てくることを期待したいと思います。



2006年度アイデア部門佳作：岩間直哉+金塚雄太案。

アイデアのかたち

古谷 さて、ここで、今回のコンペの応募段階について話をしておきたいと思えます。応募要項で実現可能な分煙のアイデアを求めたことでもお分かりのように、分煙であつて人を分けるものではないという、前回のコンペの延長線上にあることはこの座談会からも理解いただけると思います。そのアイデア

SMOKERS' STYLE COMPETITION 2007